

狛江の代参講

平成10年3月20日発行
 狛江市和泉本町1-1-5
 電話(3430)1111

狛江の市域にも、さまざまな「講」とよばれる集まりがあり、それぞれに信仰上の目的をもって活動を続けながら、江戸時代から明治、大正、昭和、そして平成の今日まで、幾多の変遷をとげてきました。それぞれの講には、大きく分けると、庚申講や念仏講などのように、神仏への祈願や供養など地域の信仰に基づいて、講の行事の場が村うちに限られるものと、御嶽講や大山講、江ノ島弁財天講や成田講などのように、地元から離れた特定の社寺への信仰に結びついた、参詣を主な目的とする講との二つがあります。

後者には、講員が揃って、または希望者だけを募って参詣するものと、講員のうちから代表を立てて参詣する代参講とがみられます。これらの代参講の参詣先の多くは、山岳信仰に基づく霊山でした。狛江市域の主な代参講は、御嶽講、榛名講、三峯講、大山講などで、大山以外の講は、現在も続いて行われています。

代参講は、村(旧村)ごとにつくられることが多く、それぞれの講元や世話人などを中心に、参詣先の御師などとかかわりながら、運営されてきました。

代参人は、くじ引きや輪番制で何名か選ばれ、代参の費用には、講員が出しあった講金をあてていました。代参に出発する前には、身を清め、鎮守様に参詣してから出かけたものです。各講には、代参先に、それぞれ代々決まった御師がいて、その御師の営む宿坊に一泊し、翌朝、御師の先導で参拝をすませ、お札などをいただいて下山します。代参人は、各々の持ち場の家々にお札を配り、帰参の挨拶をします。ところによっては、お日待ちといって講員が宿に集まり、代参人が受けてきたお札をいただき、代参の報告が終わると、飲食を共にする飲み講になります。これは、代参人を慰労し、講員の親睦を深めるとともに、代参人がお受けしてきた御利益を、皆が分かち与えてもらうための場でもありました。

御利益は、五穀豊饒、降雨、嵐除け、雹除け、盗難除け、家内安全など、さまざまでした。代参は村の暮らしにかかわる豊作祈願などの信仰を中心としながらも、かつては数少ない物見遊山の機会も兼ねていました。一生に一度という場合もあり、全行程を歩いた時代には、苦しいながらも楽しみな旅の機会でもありました。

1 御嶽講

御嶽講は青梅市の御嶽山を信仰する講で、武蔵御嶽神社は豊作祈願の作神様として、また盗難除けの神としてあがめられてきました。農業が主な生業であった時代には、狛江の各村に講ができていましたが、今も続いているのは駒井と覚東の講です。

駒井では、現在の講員数24名。代参人は、日枝神社で行っていた2月の初寅の日の寄合いの席で2、3名をくじで決めましたが、20年ほど前からは車1台で行ける5名に、そして現在は4名になりました。代参費用には規定の講金を集めますが、昭和41年までは、小麦5合、米1升ずつを集めて、その売上金をあてたものでした。代参は4月中から5月初めまでの間で、御師の片柳家に一泊。車で行くようになってからは、日帰りが多くなりました。受けてくるお札は、講員全戸に配るものと、村用の辻札が2枚。それに作柄の豊凶を占った刷りものなど。代参から帰ると、それぞれ決めた持ち場の講員にお札を配ります。盗難除けのお札は、「武蔵国御嶽山大口真神」の文字と、おつかわしめの山犬の姿を刷った、お犬様とよぶお札で、親類などにも配っています。「御嶽神社祈禱神璽 講中安全」と書かれた辻札は、割り竹に杉の葉を付けてはさみ、日枝神社の鳥居のそばと、四つ辻の北向き地藏のところに立てておきます。

代参がひと回りするのを満講といい、その翌年には全員で登拝して、太々講といって太々神楽を奉納することもありました。

覚東では、現在の講員数14戸。御嶽山にケーブルが開通する昭和26年以前は、御師の林家に一泊していました。代参から帰ると、代参者の



畑に立てられたお札(駒井)

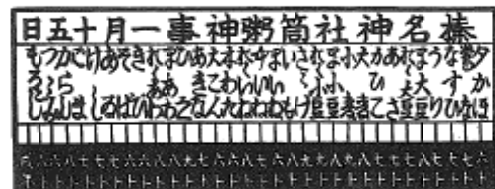
一人の家（最近は子之神社）を宿にして、お日待ちをします。宿では、床の間などに、いただてきた武蔵御嶽神社の分霊の大札を飾って、お明かりやお神酒を供え、講員にお札を分けて代参の報告をし、翌年の代参を講帳の名簿の順に決めてから、飲み講になります。ご馳走は手打ちのソバ（うどん）が中心でしたので、このお日待ちを、今もソバ講とよんでいます。

御嶽の御師は、年に一度、檀廻りといって講中の家々をまわってお札を配ったり、祈禱をしたりします。昔から御師の泊まり宿になっている家もあり、和泉や猪方などでは、講の行事がなくなった今でも、御師による配札が続いています。

II 榛名講

群馬県の榛名山の榛名神社は、とくに雹除け、嵐除けの神として広く信仰をあつめてきた作神様です。かつては、村ごとに講がつくられていましたが、今も続いているのは、猪方と小足立・覚東の講だけになりました。

猪方では、現在の講員は29名。代参は戦後しばらくまでは2名で、その後6名になり、現在は4名。代参の日取りは、4月末から5月上旬の間。榛名山の御師の佐藤家か伊香保温泉に一泊し、代参から帰ってくると、各自が持ち分を決めてお札を配り、そのとき、くじを引いてもらって来年の代参人を決めます。神社からは、お札のほかに、正月の筒粥神事で占った作柄の予想の刷り物もいただてきます。辻札は、「風雨順時 五穀豊饒 榛名神社 御祈禱御札」と刷ったもので、割り竹にはさんで庚申様の辻に立てておきます。



作占いの筒粥

昭和30年頃まで榛名講が行われていた岩戸では、代参人は3、4名で、代参から帰った翌日、その中の一人の家を宿してお日待ちをし、お札を分けたり、筒粥の作占いを披露したりしました。和泉では、毎年3月1日に泉龍寺で開かれた戸主会のとて、各地区ごとに代参1名をくじで選り、10名の代表を決めていました。榛名山の代参は、かつては榛名に一泊、妙義にも一泊することもあったそうです。

榛名講のうち、小足立・覚東の講は、同じ仲間で作る三峯講と一体になったもので、榛名・三峯講とよんでいます。

III 三峯講

秩父の三峯山の三峯神社は作神様として、また、御嶽山と同じく盗難除け、火難除けの靈験で信仰をあつめてきました。三峯講は、駒井にも一時期つくられていて、昭和30年代まで代参が行われていました。

今も続いている小足立・覚東の講は、小足立を中心に覚東の人たちも参加する講で、現在の講員は45名。「榛名・三峯講」の名称のとおり、両社の代参を兼ねるもので、4月初めから末の間に、三峯神社に参拝のち伊香保温泉に一泊し、榛名山の御師の鐸木家で昼食、お札をもらいます。かつては御師のところに泊まりました。代参は5名、3月の初寅のときにくじを引いて決めます。三峯神社で受けるお札は、火除け、諸災除け、お犬様の盗賊除けなどがあります。

IV 大山講

神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社は、とくに雨乞いの御利益で信仰をあつめてきました。講中の代参は春山の4月、または夏山の8月初めに登拝し、大山参りの帰りに江ノ島詣でをすることもありました。

大山様の講が盛んであったのは大正のころまでで、昭和の初めまでは代参も行われていたようです。代参については明らかではありませんが、和泉では地区を単位にして講がまとまっていて、上和泉の上南地区などでは、講の全員で登拝したこともありました。小足立では、行者の栗山正利氏が先達（せんだつ）となって、大山参りが行われていました。また、駒井では、大正のころ大山講が復活したのですが、2、3年代参を送っただけで解散したそうです。

日照りのときの雨乞いは、村ごとに行われたもので、代参2、3人が登拝して、竹筒にお水をいただて帰り、鎮守様に供えてから、雨乞いの元水にしたものです。

大山の夏山開きから、山じまいまで（7月27日～8月17日）のころには、大山様の講の人たちによって、大山の望めるところに、ご神燈がともされました。岩戸や小足立は昭和15、6年頃、上和泉では昭和56年の夏を最後に江戸時代末から続いていた献燈は行われなくなりました。（狛江市文化財専門委員 中島恵子）